サルヴァトール・アダモの“Tombe la neige”
―アダモ私論1：「白と黒の心象詩」に関する考察―

石　渡　利　康

Toshiyasu Ishiwatari. Un essai sur Salvatore Adamo : “Tombe la neige”. ***Studies in International Relations*** Vol. 34, No. 1. October 2013. pp. 77 − 86.

“Tombe la neige” est une chanson francaise composée et chantée par Salvatore Adamo quand il avait 19 ans. Il est né en Sicile en 1943. Mais la famille Adamo vivent en Belgique depuis 1947. Salvatore a rencontré un grand succès en 1963 avec “Sans toi ma mie” et “Tombe la neige”. “Tombe la neige” est chantée dans de nombreuses langues:français, allemand, italien, turc, néerlandais, espagnol, portugais et aussi japonais. Cet essai sur “Tombe la neige” est une tentative de mettre “le blanc” en contraste avec “le noir” dans ses paroles.

1．幾つかの問題意識

サルヴァトール・アダモ（Salvatore Adamo）は，いうまでもなく国際的に知られたシャンソン歌手である[(1)]。アダモと聞いて，腹踊りのアダモちゃんを思い浮かべるのだけは止めてほしいと願う。サルヴァトール・アダモは，以前はしばしば来日し公演を行っていた。その回数は，30回を超えているであろう。しかし，今年末には70才になるという年令のせいか，訪日回数は極端に減った。最近の訪日は，2010年である。また来てほしいと願いながら，CDを聴いたりyou tubeで録画を見たりしている。

私たちの年頃の人間にとっては，アダモの歌は若い頃の歌として思い出が深い。ここで「私たち」とは，大雑把にいえば，ビートルズよりもエルビス・プレスリーのほうが好きな世代のことである。もっといえば，何とはなしにアメリカ文化よりもヨーロッパ文化のほうに惹かれている世代である。エルビスはアメリカ人だから，それでは矛盾しているではないか，といわれればその通りである。好みなどは所詮合理的ではなのだから，それでいいのである。

不思議なことだが，ある年令を境に，それより上の人はエルビスが好きで，それより下の人はビートルズが好きだという傾向が認められる，と昔歌手だった長沢純氏から聞いたことがある。その通りだと思う。

もっとも，好みの相違は理論的なものではなく感性によるものであるから，エルビスとビートルズ両者の優劣とは関係ない。個人的好みでいえば，ビートルズは嫌いである。というよりも，より正確にはジョン・レノンとオノ・ヨーコが嫌いなのである。理由は自分でもよく分からないが，1969年の平和イベント「ベッド・イン」で声高にメッセージを発するところに何とはなしに胡散臭さを感じたからだと思う。有名な「ベッドから平和を」の写真などは戯けの最たるものである，としかいいようがない。

それはともかく，私が学生・院生だった頃は，シャンソンが盛んだった。フランス映画もよく上映されていた。ジャン・ギャバン，ジェラール・フィリップ，フランソワーズ・アルヌール，ジャン・マレーなど，思いだすままに書けば枚挙にいとまがない。ジャン・ギャバンの *Touchez pas au grisbi*（「現金に手をだすな」）など，裏社会に生きる中年男の哀愁を見事に描き切っていた。背中で演技できる名優であった。同時に当時盛んだったものに，ハリウッド製の古典的西部劇があった。（「古典的」とわざわざ断わったのは，後に作られるようになったイタリア製のスパゲッティー・ウエスターンと区別したかったからである。）昔は，

こうした映画から「男や女を学んだ」人は少なくなかった筈である。シャンソンは，映画と同様人生の影絵だったのである。

当時からシャンソンには，大人の女性，男性の雰囲気が漂っていた。1970年ごろ流行った「オー・シャンゼリゼ」は若いパリジェンヌを唄ったもので歌っているダニエル・ヴィダルも若い娘だが，それでも大人の女性へ脱皮する雰囲気を醸し出していた。歌詞もよかった。親密度を表わすvouvoyerが一夜明けてtutoyerになるところなど見事である。ちなみに，「オー・シャンゼリゼ」の「オー」は感嘆詞ではなくて，原語ではAux Champs-Élyseesだから場所を表わす前置詞で「シャンゼリゼで」になる。

「オー・シャンゼリゼ」と比較すれば，今流行のAKB48など小娘の歌とアソビ以外の何物でもない。どうしてあのようなものが流行るのであろう。あのようなものはペドフィールを作り出すだけで，歌の範疇外である。そういえば，日本社会は明らかに幼児化している。交通機関などでアナウンスする女性は，どうしてあのような少女じみた声を出すのだろう。社会が子供っぽさを好む象徴である。いうまでもなく，これは偏見と独断での私見に他ならない。

しかし，あなたは古いものに憧れているだけではないか，という批判は当たらない。私は，フィンランドのカリスマ的ヘビー・メタル・ロックのレニングラード・カウボーイズも好きだし，マドンナ系に連なるレディー・ガガなど最高だと思っているのだから。もっとも，鶴田浩二が「傷だらけの人生」で歌っているように，「古い奴だとお笑いでしょうが，古い奴ほど新しいものを欲しがるものでございます」といったところかも知れない。

さて，本題のサルヴァトール・アダモに移ろう。

アダモの歌は，大部分が彼自身の作詞・作曲によるもので，フランス語である。生れたのは1943年11月1日シチリア島南部のコミゾ（Comiso）であるが，炭坑夫の父は家族を連れてベルギーに移住した。その時，彼はまだ3才であった。多言語国家のベルギーにあってフランスに近い南部のジュマップ（Jemappes）で育ったので，フラマン語ではなくフランス語が彼の母語である[(2)]。

あまり知られていないことであるが，彼はシャンソン歌手である他に，『幸せの思い出はさらに幸せである』（*Le souvenir du bonheur est encore du bonheur,* 2001年），『魂の言葉』（*Les mots de l'âme,* 1994年）を書き作家としての顔も持っている。さらに映画『ひなげしの島』（*L'île au coquelicot,* 1974年）を監督，主演してもいる。多彩な人物なのである。

この小論は，ヨーロッパにおけると同様に，日本でももっと高く評価されてよいと思われる詩人としてのアダモに重点を置きながら，彼の諸相の一端を少しばかり探ってみようとする試みである。その場合，アダモの詩のもつ「脱国籍性」を意識の背景に置くこととする。

用いた基本的研究資料は，大部分がフランス語とイタリア語で書かれたもので，それに日本語のものが加わる。アダモに関するブログ等も必要である場合には利用した。研究方法は，事の性格上クロス・ディシプリンに妥当だと思われる価値評価[(3)]を加味したものである。

ところで，私は，主として北欧・バルト諸国の法と地域研究を対象とする一研究者である。南欧の仁義の社会の事情にもある程度通じているし，論文も書いている。詩は通常文学の分野で扱われる事項であり，詩や文学に関しては好きではあるが門外漢である。かつて40年も前に「北欧文学」を大学で教えた経験はある。しかし，不遜な言い方だが，それは余技みたいなものであった。

論文という限りは，多少とも固い表現で書くのが日本の常識では筋かもしれない。しかし，テーマ自体が案外柔らかいので，記述の文体も固苦しくなく平易なエッセイに近いものとした。学術論文は，固い文章でなければいけないというのは一種の偏見である。エッセイ的な記述の方法は，北欧諸国の学術誌で結構目にすることがある。この論文は，多少ともそれに倣ったところがあることは否定できない。ではあるが，テーマに対するアクセスの姿勢は，言うまでもなく真摯である。

本小論の副題を「アダモ私論1」としたのは，試論2，3と続くことを前提としているからである。現時点では，私論2では「インシャラー」，私論3では「ザンジバル」と「私の痛ましいオリエント」，

それに続いて小説『幸せの思い出はさらに幸せである』を扱う予定である。アダモ私論1は，白と黒の心象詩としてのTombe la neigeとその周辺事項である。

2．脱国籍的芸術家アダモ

アダモは無国籍的な歌手である，という人がいる[(4)]。無国籍とは一匹狼のようで一寸格好いいが，国家の法的保護を欠く存在である。アダモの国籍はイタリアである。しかし，ベルギー国籍も持っているようである。これは調べれば分かる。もっとも国籍云々を論じることは，彼の場合あまり関係がない。彼の歌はどこででも通用するという性格をもっているからである。彼の歌は，「国境のない」（sans frontière）ものだといえる。簡単にいえば，脱国籍・脱国境的である。

それに，現在のヨーロッパでは，国籍よりも市民権に関心が置かれているのが実情である。例えば，コペンハーゲン大学の法学部に提出された博士論文に“Fra nationalitet til medborgerskab”というのがある。『国籍から市民権へ』という意味である。博士論文の提出者は，コペンハーゲン大学准教授でイタリア系の女性Silvia Adamoである。名前が奇しくもアダモだが，サルヴァトール・アダモとは関係ない。論者は，法哲学者のジョルジョ・アガムベンの思想をも引用して，市民権の重要性を綿密に論述している[(5)]。ちなみに，ヨーロッパ諸国では二重国籍を認めている国が結構ある。ベルギーも二重国籍を認めている国の1つである。

さて，ここでアダモの活動の概要をクロノロジカルに見ておくことにしよう[(6)]。

- 1961年（17才）－サン・カン音楽祭コンクールで優勝。『ペルケ』（Perché）でデビュー。シャルル・アズナブールが後見役。
- 1962年（18才）－『ブルージーンズと皮ジャン』（En blue jeans et blouson de cuir）
- 1963年（19才）－『サン・トワ・マミ』（Sans toi, ma mie），『雪は降る』（Tombe la neige）。
- 1964年（20才）－『愛しのパオラ』（Dolce Paola），『一寸失礼』（Vous permettez Monsieur），『ろくでなし』（Mauvais garçon），『夜のメロディー』（La nuit）。
- 1965年（21才）－『夢の中に君がいる』（Mes mains sur tes hanches），『君を愛す』（J’aime）。シャンソンの殿堂パリの「オリンピア劇場」初出演。以後，頻繁に出演する。フランソワ・モーリャックがアダモの詩を絶賛。
- 1966年（22才）－『インシャラー』（Inch’Allah）。ジュマップ市名誉市民。「*Vie catholique*」紙で同年度重要人物として，キング牧師，ケネディー大統領，ドゴール大統領，ローマ法王と共に，アダモの名前が挙げられる。
- 1967年（23才）－『アンサンブル』（Ensemble），『二人のロマン』（Notre roman）
- 1969年（25才）－『明日は月の上で』（A demain sur la lune），『モン・シネマ』（Mon cinéma）。
- 1970年（26才）－映画『ひなげしの島』（L’île au coquelicot）制作。
- 1973年（29才）－『海のマリー』（Marie la mer）。『再び目覚める人へ』（À ceux qui revent encore）出版。
- 1975年（31才）－『私の人生』（C’est ma vie）。
- 1977年（33才）－『限りなき愛』（Si tu étais）。
- 1980年（36才）－詩集『海の魅惑』（*Le charmeur d’océans*）。
- 1983年（39才）－『ラビアの丘』（Les collins de Rabiah）。
- 1987年（43才）－生れ故郷シチリアで歌う。
- 1993年（49才）－『橋の向こう側』（Del’autre coté du pont），ユニセフにより直接「親善国際大使」に任命される。
- 1994年（50才）－詩集『心の言葉』（*Les mots de l’âme*）出版。
- 2003年（59才）－『ザンジバルの夕べ』（Un soir au Zanzibar），『私の痛ましいオリエント（Mon douloureux Orient），『はたち』（Vingt ans），『時間は止まっていた』（Et le temps s’arretait），『ヘ短調のメロディー』（Un air en F mineur）。

3.『雪が降る』（Tombe la neige）のフランス語「歌詩」と邦訳

アダモといえば，『雪が降る』（Tombe la neige）がつとに有名である。カンツォーネの色合が混じったこの歌は，1963年，彼が19才のときの作である。同じ19才でも，私など入試なしにトコロテン式に法学部に進んで，ボヤーッと暮らしていたので違えば違うものである。アダモは，19才でこれもよく知られている『サン・トワ・マミ』（San toi, ma mie）を大ヒットさせ，一躍スターダムにのし上がった。早くから開花した感性あふれる人なのである。

Tombe la neigeの原詩は，次の通りである[7]。番号は元々は付けられていないが解釈の便宜上私が付したものである。

TOMBE LA NEiGE

1 Tombe la neige
Tu ne viendras pas ce soir
Tombe la neige
Et mon coeur s'habille de noir
Ce soyeux cortège
Tout en larmes blanches
L'oiseau sur la branche
Pleure le sortilège

2 Tu ne viendra pas ce soir
Me crie mon desespoir
Mais tombe la neige
Impassible manège

La…la…la…la…,
Hum…hum…hum…

〈Parle〉
3 Tombe la neige
Tu ne viendras pas ce soir
Tombe la neige
Tout est blanc de desespoir

4 Triste certitude
Le froid et l'absence
Cet odieux silence
Blanche solitude

5 Tu ne viendra pas ce soir
Me crie mon desespoir
Mais tombe la neige
Impassible manège
Mais tombe la neige
impassible manège

La…la…la…la
Hum… hum… hum…
La-la La-la La-la

フランス語の美しい詩である。アダモが日本語で歌っているのは，一般的には安井かずみ訳で次のようである[8]。

雪は降る
あなたは来ない
雪は降る
思いこころに
むなしい夢
白い涙
鳥は遊ぶ
夜はふける

あなたは来ない
いくら呼んでも
白い雪が
ただ降るばかり

ラーラ　ラーラ　ラーラ
フーム　フーム　フーム

［せりふ］
……
雪は降る
あなたの来ない夜
雪は降る

すべては消えた
……

この悲しみ
この寂しさ
涙の夜
一人の夜

あなたは来ない
いくら呼んでも
白い雪が
ただ降るばかり
白い雪が
ただ降るばかり

ラーラ　ラーラ　ラーラ
フーム　フーム　フーム
ラーラ　ラーラ　ラーラ

4．白と黒の心象詩

まず初めに，直截的ではあるが私訳を書いておこう。詩作成能力の欠如のため，韻はふんでいない。

『雪が降っている』

1 雪が降っている
あなたは今晩来ないだろう
雪が降っている
そして，私の心は黒い衣をまとっている
この絹のような雪の行列
全ては白い涙におおわれ
枝に止まっている鳥は
雪が白一色にした魔法を嘆いている

2 あなたは今晩来ないだろう
絶望のあまり私は叫ぶ
でも雪は降っている
非情な仕打ち

ラーラ　ラーラ　ラーラ
ウーム　ウーム　ウーム

［せりふ］
3 雪が降っている
あなたは今晩来ないだろう
雪が降っている
全てが絶望で白一色

4 悲しい確信
寒さとあなたの不在
この堪え難い静けさ
空白の孤独

5 あなたは今晩来ないだろう
絶望のあまり私は叫ぶ
でも雪は降っている
非情な仕打ち

ラーラ　ラーラ　ラーラ
ウーム　ウーム　ウーム
ラーラ　ラーラ　ラーラ

いうまでもなく，詩はそれが書かれた言語でなければ本当の良さは理解できない。詩ばかりでなく小説もそうであるが，特に詩となると短い語句で作られ，無韻詩を別として通常は韻を踏んでいるので原語での理解は大切である[(9)]。

ところで，話が若干横に逸れるが，重要と思われるのでここで確認しておきたいことがある。それは，「詩」と「詞」の使い分けである。アダモは，作詞，作曲を行い歌っている。いわゆるシング・ソングライターである。実は，フランスではシャンソンの文章はパロール（paroles），すなわち言葉であるから，本来ならば「歌詞」とすべきである。英語ならば，lyricsである。「詩」のほうはポエーム（poème）となる。それにもかかわらず，あえて「歌詩」としたのは，たとえ作曲を前提に創ったものであっても，アダモの作品は曲なしに詩としての美しさを十分すぎるほど備えているからに他ならない。もちろん，「歌詩」とするのは言語使用という点からみれば掟破りである[(10)]。

『雪が降る』は，多くの歌手によって歌われてい

る。しかし，何といっても一番良いのは，アダモ自身の歌っているものである。若い頃嗄れ気味であった彼の声は，中年になってからはかえって味わい深くなった。特に，私が最も好きなのは，ドロテ（Dorothee）とデュエットで歌っているものである。これはフランスのテレビのロックンロール・ショーを録画したもので，you tubeで聴くことができる。アダモは当時49才でドロテ39才の今から20年前のものだが，ドロテがまるで人形のように可愛らしい。

出だしがIl neigeではなく，いきなりTombe la neigeで倒置強調なのは，フランス文学者の三木原浩史教授が指摘しているように強烈である。当たり前だが，文章の最初に来た言葉がインパクトをもつのは当然である。

季節は，冬である。詩の作者アダモあるいは「虚構の人物」は窓際にいる，と想像できる。ドアーを開けて外を見ているというのは，寒さの点から見て不自然であろう。ヨーロッパの冬は寒い。詩は，場所を特定していない。しかし，アダモの住んでいたベルギーはフランスよりも北に位置している。寒さもひとしおである。平地のベルギーでは，大雪になるのはそうしばしばではない。だが，風を伴う雪はたまに交通の便に支障をもたらすこともある。

雪のイメージは，国や地域によって異なっている。日本の歌では，吉幾三作詞・作曲で自ら唄っている『雪国』，石川さゆりの歌う『津軽海峡冬景色』など，雪オンパレードである。孤独，悲しみなどの心の痛みが描かれていて素晴らしい。『風雪流れ旅』は，苦労を感じ，その苦労を克服する勇気を与えてくれる[11]。

カナダのフランス語圏の女性歌手イザベル・ブーレ（Isabelle Boulay）は，“C’était l’hiver”（『冬だった』）を歌っている。美しい曲であるが，歌詞は寂しい。「生は苛酷だと彼女はいった，彼女はもはや太陽も教会の静けさも信じなかった，彼女は私の微笑みをも恐れ，心の底は冬のようだった」（Elle disait que vivre était cruel, Elle ne croyait plus au soleil, Nu au silence des églises, Même mes sourires lui faisaient peur, C’était l’hiver dans le fond de son cœur）。まるで，死を予感させるフレーズである。事実，歌の中の彼女は20才の夕べに生を閉じるのである[12]。

冬と雪が出てくる歌の多くは，どうしてこうも悲しいのだろうか。

昔ヨーロッパでは，雪は決してロマンティックなものではなかった。村や町は，冬の間孤立状態に置かれる。隣の集落には森を通り抜けなければならなかった。その森には，狼がいていつ襲われるか分からない。危険そのものであった。日照時間の少なさは，冬を暗い色，すなわち黒と結びつける。雪は，確かに白である。しかし，冬に降るものだけに，雪の表面的白さの背面には常に黒のイメージが隠れている。雪は多重のイメージをもっており，場合によっては，雪の白さは反対にある黒をも表象すると考えられる。すなわち，白の意味はアンビバレント（二律背反的）である。

Tombe la neigeをあらためて読んだ時，私の頭にはこの詩は「白と黒の心象詩」であるというアイデアが浮かんだ。以下，私訳に基づいて，このアイデアが正しいことを証明するために詩の解釈を試みよう。

この場合，3つの要素を考慮する必要がある。第1は，表象されている色そのものを考察することである。第2は，イメージをもつ語あるいは文章を考察することである。そして，第3は，作品中の人物，すなわち主人公の内心を推察することである。解釈者は，これら3つの要素を個別に考察したり，あるいは複合的に絡み合わせて一定の推論的結論を導くのである。

詩の題名であり，詩の中で5回繰り返されるTombe la neige は，ここでは「雪は降る」よりも「雪が降っている」という情況を示す進行的な意味に訳すべきである。しかし，日本語での歌詞としたときは「雪は降る」か「雪が降る」としかしようがない。「雪が降っている」では，題名としてもしまりがないからである。

1番の2行目，Tu ne viendra pas ce soirの「あなたは来ないだろう」の来ないのは雪が降っているからなのか，それとも雪が降っていることとは無関係にあなたは来ないのか。文脈からは，分からない。

1番4行目Et mon coeur s’habille de noir（私の

心は黒い衣をまとっている）では，はっきりと黒が明示されている。黒い衣とは，喪服のことである。2番は，白のイメージが支配している。Larmes blanches（白い涙）という言葉は聞いたことがないが，blanc（blanche）のもつ偽りのなさを連想させる。この語は，次の行のbranche（枝，分枝）と韻を踏んでいる。

枝に止まっている鳥は，何を意味するのか。象徴性はどういうものか。アダモがシンボリズムを考えながら，作詩に励んだとは考えられない。いやアダモだけではない。どのような詩人も，象徴の意味するところを頭に浮かべながら詩を作ることはないであろう。詩人は，事象を内面化し熟成させたものを言語として外面化するのである。当該言語（単語あるいは文章）がどのようなシンボリズムと関係するかを追求・理解するのは，第三者としての読者と研究者である。事物には，全てアーキタイプ（原型）としての象徴があるが，残念なことに私たちの多くはそれを理解していない[13]。

鳥のもつ象徴性は，実は鳥の種類によって違っているから少々厄介である。一般的に，鳥は空に羽撃くところから天と結びつき，神業的な教示をもたらしたりする。そこから，A little bird told meという表現がうまれたとされる。これは，日本語にすれば,「風の便りに聞いた」である。

この詩の中の鳥は，どのような鳥だろうか。人里にいる鳥だから鳩かもしれないし，あるいはもっと小さい鳥のような気もする。いや，きっとそれに違いない。色は灰色であろう。カラスだという解釈も成り立つ可能性を示唆する見解もある[14]。カラスは死をイメージする鳥だが，どうもしっくりこない。鳩と枝（とくにオリーブの木の枝）との取り合せは「平穏」「心の安らぎ」を象徴する。枝に止まっている鳥が魔法に涙を流しているのは，心の安らぎが得られないことを暗喩していると考えるほうが自然である。8行目のle sortilègeは「魔法」，ここで魔法とは雪が全てを覆って真っ白にする様子のことである。

2番のMe crie mon desespoirは，直訳すれば「絶望が私に叫ぶ」でdesespoirが擬人化されている。「絶望のあまり私は叫ぶ」の意味である。あるブログによると，アダモ17才の時の恋の経験が基礎にあるという[15]。もし，そうであれば，17才の若者にとっての強烈な原体験がこの詩の基礎をなしているわけである。立証する必要があるかも知れない。

3番は，台詞語り（parlé）である。白と絶望が殆ど同位に置かれている。ここでは白は空虚であると同時に黒を内包していると解釈できる。4番は，静けさの中での孤独を表現している。L'absenceは不在で，あなたが居ないこと，である。5番のmanègeは策略だが，回転木馬という意味もある。

『雪が降る』には，どうしようもない孤独感が溢れている。名詞だけを拾い挙げても，雪，黒（喪服），涙，鳥，魔法，絶望，非情，仕打ち，あなたが居ないこと，空白，静けさ等々，明るさや希望を暗示するものは1つもない。それに，情景は静止している。雪が降っているという「動」があるにもかかわらず，全体はまるで静止した白い絵画のようである。その「白」の中には「黒」の象徴するものが内包されている。

白と黒とが同じ象徴性という点で同じ意味をもつことは，言語心理学的に証明できる。もっと簡単に言えば，言葉とシンボルのもつイメージとも関係しているのである。

ラテン語系に属するフランス語やイタリア語の「白」を意味するblancやbiancoは，非常に稀な例だがゲルマン語に由来している。稀な例といったのは，多くの言葉はラテン語からゲルマン語に入っているからである。ゲルマン語のblancが使われる以前にはラテン語のalbusが用いられていた。なぜこうした言語使用の変化が発生したのかは，定かではない。英語のwhiteは，古ノルド語のhvitrと通じている。元々はサンスクリット語のsvetah「光」で，リトワニア語の「眩く光る」のsviesiと結びつく。

それでは，黒の問題に入ろう。フランス語の「黒」のnoirは，ラテン語のnigerから来ている。語源はギリシャ語の$\nu\varepsilon\kappa\rho o\sigma$で「死」,「死体」を意味する。ラテン語には，もう1つ「黒」を示す語にaterがある。同じ黒でも，こちらは「くすんだような黒」である。フランス語では，もう古語となったatreがこれである。

英語のblackは,「焼け焦げた」という意味のblaekから来ている。オールド・ノースではblakkrで似ている。Blaekには類語にblacがあるが，これは黒ではなく,「明るく白っぽい」である。おそらく，物を燃やしたとき炎は明るく，焼け落ちた物は黒くなっていることから観念連合の法則が働いたものと推測できる。

白の中に黒が内包されているという意味は，火を中心として，燃え上がっている時は白で燃えつきた時は黒く見えるという事実と結びついている。さらに，白と黒は無彩色（acromatic color）であるという共通性も存在する。無彩色とは，色の3属性である色相，明度，彩度のうち，明度だけをもつものである。

詩人の谷川俊太郎は，白と黒との相関関係を『定義』の中で次のように書いている[16]。

「どんなに白い白も，ほんとうの白であったためしはない。一点の翳もない白の中に，目に見えぬ微小な黒がかくれていて，それは常に白の構造そのものである。白は黒を敵視せぬどころか，むしろ白は白ゆえに黒を生み，黒をはぐくむと理解される。存在の瞬間から白はすでに黒へと生き始めているのだ。

だが，黒への長い過程に，どれだけの灰の諧調を経過するとしても，白は全い黒に化するその瞬間まで白であることをやめはしない。たとえ白の属性とは考えられてはいないもの，たとえば影，たとえば鈍さ，たとえば光の吸収等によって冒されているとしても，白は灰の影で輝いている。

白の死ぬときは一瞬だ。その一瞬に白は跡形もなく霧消し，全い黒が立ち現れる。だが……

どんなに黒い黒も，ほんとうの黒であったためしはない。一点の輝きさえもない黒の中に目には見えぬ微小な白は遺伝子のようにかくれていて，それは常に黒の構造そのものである。存在のその瞬間から黒はすでに白へと生き始めている……」。

白と黒との微妙な補完関係は，ギリシャ神話にある女性的白鳥のシンボル性に見ることができる。

「光と誉れに満ちた白鳥の白い身体は，暗黒と絶望を前提としており，又同時に一筋の光もささない闇の中にこそ，輝くばかりの白鳥が隠れている。この不思議な逆説は時代や場所にかかわりなく普遍的な感覚であるように思える」と，フランス文学者の上村くにこは書いている[17]。

白へと生き始めている黒という谷川俊太郎の表現の中に，私たちは白への「再生」を読み取ることができる。しかし，表層的な黒は救いようのない感覚と結びつく。

救いようなないシャンソンといえば，ダミア（Damia）が歌った『暗い日曜日』（Sombre dimanche）がある。ヤーヴォ・ラースロー作詞，シュレッシュ・レシェー作曲で1933年にハンガリーで生れたこの曲の原題は“Szomoru vasarnap”（『悲しい日曜日』）である。日曜日に亡くなった恋人を想う女性が自殺を決意するという内容で，自殺率が高まって発禁になったという俗説がある。発禁になったのは本当だが，その理由は自殺率の増加ではなかった。1936年にフランスのダミアが歌って世に広がった。

もう1つ恋人を思い待ちあぐねる歌に,『小雨降る径』がある。ティノ・ロッシが歌い一世を風靡したこのタンゴ調のシャンソン“Il pleut sur la route”は，恋人が来るか来ないかを歌っているので，まだ救いがある。日本語での『小雨降る径』は，菅原洋一と佐冴安奈のデュエットが素晴らしい。

『雪が降る』は，あえて言えばこの両者の中間にあるような気がする。しかし，聴いて歌ってメランコリックになることはない。その理由の1つは，メロディーのもつ美しさである。カンツォーネの旋律と類似しているのはイタリア人の血のなせる業かも知れない[18]。全くの偶然だろうが，なぜか俳句との相似を連想させるところもある気がする。

詩や小説の内容の理解には，2つの局面がある。1つは作家の意図した内容の正確な理解であり，もう1つは，作品を独立した存在と考え読者の立場から自由に論じ理解することである。一種の読者参加といってもいい。これは，絵画を鑑賞者が自由に自分の感性で受けとめ，理解するのに似ている。画家は絵に題名をつけるだけで通常解釈しないので，観客の自由鑑賞の幅員は広い。『雪が降る』は，読者参加にうってつけである。

5．存在のもつ価値－パティ・ペイジとサルヴァトール・アダモ－

インターネットで検索しているうちに，「サルヴァトーレ・アダモ：引退の時期を迎えた歌手」と題するブログを目にした。ブロガーのプロフィールは，日本経営学界を解脱した社会科学の研究家で，現在社会・産業経営に関連する諸問題を研究している人である。『破綻する大学の再生は可能か？』なども書いているから大学の教員だったようである。年令は70才位だろうと推定できる。

ブログの内容の概要は，こうである。2010年のオーチャード・ホールでのコンサートに約1万円を支払って出掛けたが，歌唱力が落ちている，舞台衣裳がサラリーマンが着るようなドブネズミ・ルックで気にくわない，年配の観客の鑑賞行為がなっていない，だから日本はアダモのような外タレ天国から早く脱却しろ，大体このような調子である。

歌手が観客を過去の思い出に浸らせるというのも，決して悪いことではない。人間誰しも，年をとれば衰える。歌手の場合，衰えは声量に現われる。アダモは現在69才である。このブロガーが行ったコンサートのときは，66才である。声が悪くなってもしかたがないであろう。服装だが，アダモは大体が地味で，キンキラキンの派手な衣裳は身につけていないことが多い。

昨年，持ち歌『テネシー・ワルツ』でよく知られていたパティ・ペイジが高齢で亡くなった。おそらく最後の舞台だと思うが，持ち歌を歌っているテレビ番組を見たことがある。楽しそうに歌っていた彼女だが，途中でつまってしまった。記憶が飛んだのであろう。その時アメリカの観客は，どうしたか。皆は手拍子をとりながら，『テネシー・ワルツ』の続きを歌いあげたのである。微笑ましい光景であった。ここには，歌手と観客との間の揺るぎないシンパシー，すなわち心の共鳴が存在していた。

アダモのTombe la neigeは，紛れもなくシャンソンの歴史の1ページを構成するものである。声に衰えがみられようが，それもまた彼の歌うシャンソンの一部であり，彼の存在自体が価値をもっているのである。そのことが理解できない人は，不幸である。

註

(1) Salvatore Adamoのイタリア語の読みではサルヴァトーレ，フランス語ではサルヴァトールである。日本では，サルヴァトール，サルヴァトーレの両方を使い，厳密な区別はしていないようである。

(2) Coljon, Thierry: Adamo, *C'est sa vie*. Editions du Felin, 2003. pp.25-28.

(3) 価値評価の問題については，Kruse, Frederik Vinding: *Erkendelse og vurdeling*. Gad Forlag. 1942.

(4) 阿部亨Official Web Site（http://blog.avexnet.or.jp/abe/diary/2010/10/19-2287.html）p.2 2013.02.24 最終確認。

(5) 現在ヨーロッパでは，国籍よりも市民権のほうが問題となる傾向がある。これについては，http://jura.ku.dk/phd/blaa-bog/silva-adamo。

(6) 専らColjon, Thierry: *op. cit.*, 3003. pp.194-196.

(7) 原詩は，Adamo, Salvatore: A ceux qui revent encore. Les plus belles chansons d'une vie. Albin Michel. 2003. p.405. この本は，2003までの詩約250を含む詩集である。詩集だから，楽譜は記載されていない。私が持っているCDの『Salvatore Adamo』（Victor）に収められている歌詞とは若干異なっているが，シャンソンとして歌われているのは後者の方である。したがって，ここでは後者を用いることにする。アダモが日本語で歌っているのも，これである。

(8) 持ち歌として越路吹雪が歌っていたのは，岩谷時子が訳している。その他，画家の宇藤カザンによるものなどがある（http://kazanuto.blog59.fc2.com/blog-date -2012 2.html 2013.01.07 最終確認）。

(9) 三木原浩史：『シャンソンの四季』，彩流社，2005年，p.133.

(10) 芸術評論家の葦原英了氏は，「もともとシャンソンというものは歌詞がたいせつなので，現

在ではだいぶ事情が変わってきているが，歌詞が第一，音楽が二の次というのが，シャンソンの特徴である」としている（葦原英了：『シャンソンの手帳』，新宿書房，1985年，p.195）。しかし，同氏は，シャンソンの文章は，歌詩ではなくてあくまで歌詞である，としている（p.110）。

(11) 石渡利康：『風雪ながれ旅』：苦況に抗する底力－苦労，心意気，情－，国際文化表現学会会報，Vol.33 2011 No.1 pp.4-5.

(12) “C’était l’hiver”の歌詞は「アミカル・ド・シャンソン」（http://lapineagileblog.fe2.com/blog-entry-179.html 2013.02.23 最終確認）。

(13) クーパー，ジーン・C・：『シンボリズム　象徴の比較文化』（日下洋右，白井義昭訳），彩流社，1987年，pp.9-14.

(14) 三木原歴史：前掲，2005年，pp.141-142.

(15) 雪が降る Tombe la neige － Chantefable〈歌物語〉（http://blogs.yahoo.co.jp/alfosinayelmal/8046987.html 2013.02.24 最終確認）。

(16) 谷川俊太郎：『定義』，思潮社，1981年，pp.46-47.

(17) 上村くにこ：「白いヘレネーと黒いヘレネー（その一）」，Gallia，25巻，1986年，p.1.

(18) アダモが生れたシチリアの歌には一種の孤独感をもつmisérabilismo（悲惨趣味）がある。これについては，Coljon, Thierry: *op. cit.*, 2003, p.66.

（2013.03.02）